

催馬楽と和歌 和歌における催馬楽の享受・展開・変容

植木朝子

催馬楽と和歌との関わりについては、すでにいくつかの先行研究があり、歌人が催馬楽を和歌にどのように取り入れたかについての指摘が重ねられている。本稿では、そうした先行研究とはやや視点を交えて、催馬楽を利用した和歌の世界が、もとの催馬楽の世界からどのように変容しているかについてみていきたい。

一 恋の催馬楽から四季の和歌へ

催馬楽「東屋」からは、「東屋」および「真屋」という言葉が非常に多く和歌に取り入れられた。次に「東屋」という語が含まれる管見に入った和歌をすべてあげた。波線部分が催馬楽と重なる表現である。

ほし

☆①あづまのふせ屋いたまのあはぬより空のほしとも見ゆる君かな
(古今和歌六帖・三七四)^②

はての冬

②あづまのきのたるひをみわたせばただしろかねをふけるなりけり
(相模集・二七七)

はての冬

③しろたへにふきかへたらむあづまのきのたるひをゆきみて

しかな

霰 右

④あづまのこやのしのやもあられふりたまをふきてもみえわたるかな
(媯子内親王家歌合・一〇)

おなじ人(あづまにはべりける人)につかはしける

左近中将隆綱

かへるべきほどをかぞへてまつひとはすぐる月日ぞうれしかりける

かへし

康資王母

☆⑤あづまのかやがしたにしみだるればいさや月日のゆくもしられず
(後拾遺集・恋三・七二七〜七二八)

をここにやるにかはりて

☆⑥あづまのあさぎのはしらわれながらいつふしなれてわすれざるらん
(肥後集・一九五／千載集・恋三・八一)

時雨

紀伊

⑦かみな月しぐるる比は東屋に雨やどりする人ぞたえせぬ
(堀河百首・九一二)

霰

国信

⑧東屋のしづのすがきの下さえて山とよむまで霰ふるなり

(同・九三二)

旅

師時

⑨たび人の板まもあはぬ東屋にやどる今夜ぞ雨なそそきそ

(同・一四六五)

二番 五月雨 右

定通

⑩さみだれは日かずへにけりあづまやののきはのかやのしたくつ
るまで (山家五番歌合・三四／金葉集二度本・夏・一三六)

旧年立春

常陸

⑪あづまやの軒ばのたるひ鶯は雪かき分けて春や立つらん

(永久百首・四二〇)

閏中月

為経

⑫あしぶきののきのつまなきあづまやはねやまでつきのいるぞう
れしき (為忠家後度百首・四二九)

恋二十首

親隆

☆⑬あづまやのをがやの軒の忍ぶ草しのびもあへずしげる恋路に

(久安百首・六七四／千載集・恋四・八五六)

あづまやのとり

⑭あづまやのむねとたててしまぶしをやどてやぶらぬごともの
らばや (行尊大僧正集・九二二)

あづまや

(清輔朝臣)

永万二年五月経盛卿歌合 恋

☆⑮あづま屋の軒のかやまにおふとみし人をしのぶはわが身なりけ
り

(夫木和歌抄・一四三八八)

花近民家

⑯あづまやのしばきのけぶり心せよあたら桜のにはひやつすな

(出観集・八六)

あさでの枕

九十九首菊歌中

為実朝臣

⑰あづまの庭の白きくしきのびあさでの枕秋風ぞふく

連日五月雨

(夫木和歌抄・一五四〇二)

⑱さみだれはいつかはるべきあづまやののきのしのぶもくちやし
ぬらん (教長集・二七三)

恋

恋

☆⑲あづまやのかやがやへぶきもらぬよも身にそふあめはなほぞぬ
れける (風情集・四三七)

菖蒲

⑳あづまやののきはにねざせあやめぐさうゑぬしのぶもおひずや
はあらぬ (経正集・一八／玉葉集・夏・三四二)

さいばらによす

さいばらによす

☆㉑あづまやのあまそそきにもたたなくにきみがのきはにぬる袖
かな (殷富門院大輔集宮内庁書陵部本・一一九)

さみだれ

かな

㉒あづまやのをがやがのきのいとみづにたまぬきかくるさみだれ
の比 (山家集・二二二)

時雨歌よみけるに

時雨歌よみけるに

㉓あづまやのあまりにもふる時雨かなたれかはしらぬかみなづき
とは (同・五〇三／続後撰集・冬・四五九)

あづまやと申す所にて、しぐれののち月をみて

㉔神無月しぐれはるればあづまやの峰にぞ月はむねとすみける

(同・一一一一)

田家冬夜の心をよめる

田家冬夜の心をよめる

㉕みちしばにしもやおくらんあづまやのとふのすがこもさえまさ
るなり (成仲集・五一)

廿一番 晩立 左

季経

②6 あづま屋ののきにしくをとどめおきて程なくはれぬゆふだち
のそら (六百番歌合・二八二)

羈旅 寂蓮

②7 里人のよるの宿とふあづまの軒ばに月の先やどりける

(正治初度百首・一六八五)

暁 雅経

②8 あづまのまやのあまりのやすらひにまつたつ人のおとはすぐ
なり (正治後度百首・二六五)

百二十二番 春二右 定家

②9 あづまのこやのかりねのかやむしろしくほさぬはるさめ
ぞふる (千五百番歌合・二四四)

千三百六十三番 雑一右 雅経

③0 あづまのきのしのぶのすゑのつゆいくあさおきのそでした
ふらん (同・二七二六)

寿量品

③1 東屋のまやの板まにやどりきてかりにもすめる夜はの月かな
(寂蓮法師集・一〇二)

橋本宿にて

③2 浪のうつうらははままつねもいらさくさだめぬあづまの
とこ (明日香井和歌集・一五三三)

雑二百首

③3 一夜ねぬあさでかりほすあづまのこむしろしきしのび
つつ (為家千首・九一五)

貞永七首歌合 風前掃衣 判者定家卿 民部卿為家卿

③4 み山ふく秋風さむみあづまのしづはたごろもいまぞうつなる
(夫木和歌抄・五七二五)

不遇恋五首 右衛門督為家

☆ ③5 あづま屋の杉いたぶきの隙をあらみあはぬ月日をさて過せとや
(洞院摂政家百首・二二一九)

さいばらによするこひ

☆ ③6 みし人はかれがれになるあづまやしげりのみするわすれ草か
な (建礼門院右京大夫集・五二)

夏五十首

③7 あづま屋のかやが軒ばもいかならん日かずふりゆくさみだれの
ころ (後鳥羽院御集・七二八)

夏

③8 あづま屋のひさしうらめし時鳥待つよひすぐる村雨のおと
(拾遺愚草・四二四)

月五十首

③9 あづま屋のまやのあまりの露かけて月の光も袖ぬらしけり
(同・六六三)

秋廿首

④0 あづま屋の軒のほどなき杉びさしいたくも月になれにけるかな
(同・一三三四三)

夏廿

④1 あづま屋のさせるとさしも夏のよは明くるをたたくくひななり
けり (拾遺愚草員外・一四〇)

冬のあめ

④2 むら雨に雪とけまさるあづまのあまりにおつるのきの玉みづ
(新撰和歌六帖・四一八)

まき

④3 あづまにたてしばかりのまきばしらあさきちぎりにふしはた
家良

えにき

宇都宮神宮寺二十首歌に

(同・二四四二)

浄忍法師

④ いまはわれたびともいはいあづまのまのあまりにとしのへ
ぬれば

(新和歌集・八四二)

あふひ

⑤ あづまのひさしときけばいたづらにのちのあふひになりぞし
ぬべき

(為家五社百首・一六一)

五十一番 漸傾月 左

行家卿

⑥ 月にはやふけにけらしなあづまのほどなき軒も影ぞみえゆく
(文永二年八月十五夜歌合・一〇二)

五十九番 漸傾月 右

資季卿

⑦ こよひさへ人もとひこずあづまの軒ばの西に月めぐるまで

(同・一一八)

忍恋

☆ ⑧ 恋すてふわがななたてそあづまのあさぎのはしらくちははつ
とも

(柳葉和歌集・五二三)

関東にさぶらひし時、月をみて

⑨ 思ふこそあはれなりけれあづまのまのひまもる月をながめ
て

(閑放集・八〇)

くだり侍りてのち、やがてわづらひ侍るころ、雨のふるを
⑩ さらでだに袖ほしわぶるあづまのあまりにかかるあまそそぎ
かな

(雅顕集・九三)

蚊遣火

⑪ ゆふがほの花さきかかるあづまのまのあまりにたつるかや
り火

(隣女集・四三二)

忍恋

☆ ⑫ あづまの軒のかやまをもるしぐれ音にぞたてぬ袖はぬれけり

(同・一三七〇)

夜恋

☆ ⑬ あづまのまやにはあらぬあまそそきあまりにぬるよはのそ
でかな

(同・一四二四)

雨中菖蒲

⑭ あづま屋のまのあまりのあやめ草たまさへふけるあまそそぎ
かな

(同・一九三七)

夏

⑮ あづまのま屋ののきばのみじか夜にあまりほどなき夏の月か
げ

(龜山院御集・二九／続拾遺集・夏・一八九)

百首歌よみ侍りけるに

深心院関白前左大臣

⑯ あづまのまの軒ばに雨すぎてつゆぬきとむるさがにのい
と

(風雅和歌集・雜・一四九七)

旅宿夜雨

⑰ あづまのかりねのまくら夢たえて袖にのみふるあまそそきか
な

(光吉集・二四五)

雪

関白良基

⑱ あづま屋のまのいまやと待つ人もあまりにふればとはぬ雪か
な

(延文百首・一〇六六／新後拾遺集・雜秋・八三三)

歳暮

⑲ あづまの槇の板どのいたづらに明けくれてのみくるとしか
な

(草庵集・八三〇)

旅宿霜

⑳ 東屋の尾花かりしきさぬる夜の衣手さむし霜や置くらん
(慶運法印集・一五五)

かくてしばしばすみ侍りける所の柱に書付け侍りし

⑥1 あづまのあさ木の柱かりそめに思ひながらやすみなれにけん

(李花和歌集・七〇二)

夕立易過

⑥2 東屋のほどなく過ぐる夕立に猶音残す軒の玉水

(耕雲千首・二九三)

霰

⑥3 玉みづにあらぬたまとやあづまのまの板間に霰ちるらん

(永享百首・六一七)

春雨

⑥4 あづまのまのあまりに霞みしは雨なりけりな落つる玉水

(雅世集・七二三)

軒梅

⑥5 梅がえに其名もしらぬ鳥が鳴くあづまやかをる軒の春風

(草根集・六一三)

梅雨久

⑥6 五月雨は庭にながる水がきのひさしの板も朽つる東屋

(同・二五七〇)

夕立

⑥7 あづま屋の軒ばの雲もかたかけてむね分にふる夕立の雨

(同・二五八三)

顕恋

☆⑥8 東屋のあまりにつらししのすだれ心のおくもかくれなき身は

(同・六七五二)

頼人妻恋

☆⑥9 あづまやも戸さしせぬ夜の人妻にいとど頼をかくる雨かな

寄雨恋

☆⑦0 東屋のあまり身をしる雨そそきたぶるまでになる袂かな

(同・七七二八)

時雨

⑦1 あづまのしづくもおちぬさよ時雨袖をぞぬらすあまり成るま

(垂槐集・二三二)

夏月

⑦2 月待つと立ちやすらひしあづまのあまりなるまでみじかよの

(同・四七六)

途中契恋

☆⑦3 きほひくる一村雨に立ちよりて其まほさぬあづまの袖

(松下集・四五〇)

水無瀬御廟に奉りし百首歌中、落葉

⑦4 東屋の軒のこのはの雨そそきたれたちぬれて袖をそむらん

(卑懷集・三七八)

寄屋恋

☆⑦5 涙より雨そそきてあづまのほかなき物と袖はぬれけり

(柏玉集・一五二二)

明応七年後十月廿三夜月待に、東

⑦6 出でし日の移るも不知や東屋のまのあまりにねての朝けは

(為広卿詠・八七)

詠源氏物語卷和歌 東屋

☆⑦7 あづまのあまりにもあるか深き夜にきても逢のまろねせよと

(雪玉集・五五五二)

や

新竹染軒

78 一むらとうゑしもことしあづまやのあまりにしげき庭の呉竹

(同・七七五七)

新菊有余芳

79 今朝咲くや露もまがきのあづまやのまやのあまりにもほふしら菊

(称名院集・七三四)

寄屋恋

☆80 ひとつまといつなりはててあづまやのあまりにつらきつらさみすらん

(通勝集・一二四六)

立春

81 朝まだき春のくるてふ東屋のこの戸あくれば霞む山のは

(逍遊集・一一)

荻声近枕

82 四阿の軒はの荻のそよぐ夜は枕さだめてねんかたもなし

(同・一一〇二)

旅宿嵐

83 あづまやのまやのあまりに寒き夜は嵐も恋しあふ坂の山

(同・二三八九)

春雨

84 東屋のまやのあまりにかすめるや降るも音せぬ春雨の空

(後水尾院御集・一〇七八)

梅の花さかりなる比

85 はる風にしられんもうしあづま屋のあまりに匂ふ軒の梅がえ

(梶の葉・一二二)

猫妻恋すといふ事を

☆86 東屋のまやの軒端に声するは手がひのとらの妻やこふらし

(楳取魚彦家集・一〇七)

人の家、雲ゐにほととぎす有り

87 東屋のまやの部を明がたの雲路過行くほととぎすかな

(うけらが花初編・三六〇)

さ月五日、くす玉てうじてやむごとなきわたりへまゐらすとて

88 あづまやのまきのはしらに千よかけていはひまつれるくす玉ぞこれ

(同・三七九)

雨中蛩

89 東やの雨のしづくもかずみえて軒のしのぶにとぶほたるかな

(同・四二六)

冬星

90 東屋の軒のたるひにうつろへるひかりもさむきあかばしの影

(同・九四七)

人のめのう月ばかりみまかりけるが、みとせになりける

う月になんつかはしける

91 立ちぬる袖やいかなるあづまやの軒のつまなし水枝さすころ

(同・一四〇八)

崎雪

92 あづまやのまや山おろしさえさえてわだのみさきに雪降りにつ

(亮々遺稿・六九七)

源氏ものがたりの巻の名によてよめるが中 東屋

93 あづまやのあまり身に似ぬやすらひに袖もひぢぬる軒の村雨

(三草集・七八二)

深夜待恋

☆94 月は入りて夜はまだ深き四阿屋のまやの妻戸をさしぞ煩ふ

(桂園一枝・六〇七)

深夜雪

㊦東やのあまり静に更くる夜をおきいでてみれば初雪の降る

(調鶴集・四七五)

以上の「東屋」の言葉を用いた和歌を内容(部立)の上から分類すると次のようになる。

恋	1	5	6	13	15	19	21	35	36	48	52	53	68
春	69	70	73	75	77	80	86	94					
夏	10	16	29	64	65	81	84	85	45	51	54	55	62
秋	66	67	72	78	87	88	89	91	82				
冬	12	17	34	39	40	46	47	79	82				
その他	71	74	83	90	92	95	31	32	33	43	44	49	50

催馬楽「東屋」の詞章は

東屋の	真屋のあまりの	その雨そそき	我立ち濡れぬ	殿戸
開かせ	鈍もあらばこそ	その殿戸	我鎖さめ	おし開いて来
ませ	我や人妻			

というもので、男女の会話体をとる恋の歌であるが、「東屋」の言葉を読み込んだ和歌では、恋の歌(☆印をつけた)は五分の程度(21首)で、他は、恋とは一応無関係な、春の歌が8首、夏の歌が21首、秋の歌が9首、冬の歌が19首になっている。すなわち催馬楽では季節の限定されなかったものが、和歌に取り込まれると、季節

感を与えられてゆくことが確認できるのである。

また、催馬楽の詞章により、雨をとともに詠み込むものは多く、雪や霰を含めると40首を越えるが、先の季節を反映して、夏ならば五月雨や夕立、冬ならば時雨や霰とともに詠まれるようになっていく。しかし一方、全く逆に日や月、星などがともに詠まれる例も15例ほどあり、催馬楽をふまえずとも自由に展開していることが窺われる。

雨	9	19	21	50	53	54	56	57	64	69	70	74
村雨	75	89										
春雨	38	42	73	93								
五月雨	10	18	22	37	66							
夕立	26	62	67									
時雨	7	23	24	52	71							
霰	4	8	63									
雪	11	42	58	92	95							
月	12	24	27	31	39	40	46	47	49	55	72	94
星	1	90	76									

なお、東屋の語を詠み込んだ和歌の作者で数の多さや催馬楽の表現との近さから注意されるのは、雅経(28・30・32)、定家(38・39・40・41)、雅有(51・52・53・54)、正徹(65・66・67・68・69・70)らである。

「東屋」の和歌は、催馬楽の恋の世界が、恋歌も相当数存在するものの、恋よりはむしろ季節の歌へ変容した例と言えよう。

二 滑稽な恋の催馬楽から悲恋の和歌へ

本節で取り上げるのは、同じ恋の歌でも、恋の失敗を笑い飛ばすような、どちらかといえば滑稽なものからはかない悲恋へと変わっているものである。催馬楽「石川」には「縹の帯」という言葉が使われているが、これが和歌に取り込まれ、恋の歌に散見する。「縹の帯」については以前書いたことがあり、重複するところもあるが、以下、管見に入った、「縹の帯」を詠んだ中世までの和歌を、おおよその詠歌年次順にあげる。

をここにわすられてさうぞくつつみておくりはべりけるに

かはのおびにむすびつけはべりける 和泉式部

- ① なきながすなみだにたへでたえぬればはなだのおびの心地こそすれ
(後拾遺集・恋三・七五七)

はなだのおびの所所かへりたるをきかへて、をとこのおこせたれば

- ② なれぬればはなだのおびのかへるをもかへすかとのみおもほゆるかな
(和泉式部統集・三四九)

- うらむべきことやありけん、さうすくせさせし人のひさしくおともせぬに、しくしておびにむすびつけてやりし
③ 結ぶともとくともなくて中たゆるはなだのおびのこひはいかがする
(赤染衛門集・一一〇)

秋ころ、ものへまかりけるをとこに、はなだのおびにかきつけて、あるところなる女のとらせたりし

- ④ つゆわけてあさたつ人のゆふおびにとくことのみもおもふべきかな
返し、をとこ

とくといふはなだのおびのほどはただあさゆふつゆのおきてしのばん
(四条宮主殿集・二二六～二七)

山城守なりける人のめをある人忍びてもの申すときこえけるを、程もなくかれがれになりぬと聞きてつかはしける

- ⑤ 石川やはなだのおびのなかつたえば駒のわたりの人にかたらん
(散木奇歌集・二二九八)

うらめしく侍る女を夜もすがら恨み明して帰りに侍りけるに、いかにしたりけるにか白きおびのつきてまうできたりしを返しつかはすとて

- ⑥ うきにさは中やたえまし色なくて花たのおびに思ひなしつつ
(源三位頼政集・四五八)

寄神楽恋

- ⑦ 人ごころはなだのおびのさればこそかねて思ひしなかつたえごころは
(小侍従集・一一五)

寄草恋

- ⑧ 白露のむすぶちぎりもつきくさのはなだのおびの色やうつらん
(範宗集・五五八)

恋

- ⑨ うつりやすきはなだのおびの色ぞうきたえけるなかをなにむすびけん
(明日香井和歌集・八〇八)

恋歌の中に

- ⑩ うつり行くはなだの帯のむすばほれいかなる色にたえはつらん
(統拾遺集・恋五・一〇四三)

六十番 右

寄帯恋

隆祐

- ⑪ むすびおきし花田のおびのいくよへてあはぬにかへる色はみゆらん
(光明峰寺撰政治家歌合・一二〇)

六十一番 右

同

源家清

⑫ こころのみ花田の帯の一すぢにうつろふ色はいふかひもなし

(同・一二二)

六十三番 左

同

頼氏朝臣

⑬ 月草のはなだのおびのとけそめてうらみにかへるはてぞかなしき

(同・一二五)

六十四番 右

同

下野

⑭ いしかはやあはにちぎりやむすびおきはなだのおびのかへりやすさは

(同・一二八)

逢不遇恋 北野歌合

蓮性

⑮ そのままにはなだの帯の中たえて又ゆきあはん頼だになし

(題林愚抄・六九六二)

つきくさ

信実

⑯ 月草のはなだのおびの色もうしこなたかなたのうつりやすさに

(新撰和歌六帖・二〇五九)

行路柳

実雄

☆ ⑰ 玉鉾の道の行手によりかけてはなだの帯のなびく青柳

(宝治百首・二九〇)

秋

⑱ つき草の花田のおびのゆふは山たえぬる妻を鹿やこふらん

(宗尊親王三百首・一一七)

初逢恋

家長

⑲ 月草のはなだのおびはとけそめぬかへらぬ色をたれにとはまし

(弘長百首・四七九)

寄帯恋

侍従中納言

⑳ めぐりあはん契りばかりを結びてはなだの帯の中ぞしられぬ

(白河殿七百首・五〇七)

文永二年九月十三夜五首歌合に、絶恋 後嵯峨院御製

㉑ いもとわれ花田のおびの中なれや色かはるかと思れば絶えぬる

(続拾遺集・恋五・一〇四二)

変恋

㉒ おもへたはなだのおびのかりにだにむすばぬなかのうつりやすさは

(中書王御詠・一八七)

帯

㉓ あづまにはむすび絶えける契にてはなだの帯ぞ色かはりにし

(竹風和歌抄・一七八)

かきはにあさがほの咲きつづきたるを見て

☆ ㉔ 垣にはすはなだの帯と見ゆるまで露にむすべるあさがほの花

(閑放集・三〇)

雁

☆ ㉕ うす霧につらははなるかりがねははなだの帯の中ぞたえ行く

(隣女集・一一七四)

恋

国冬

㉖ 石川やはなだのおびのとけやらであふせにも猶ぬるるそかな

(文保百首・二六八〇)

正平八年内裏千首歌中に、寄月草恋を 前中納言為忠

㉗ うつりゆく人の契は月草のはなだのおびのむすび絶えつつ

(新葉集・恋五・九五四)

寄帯恋

㉘ 行きめぐりすゑをたのまむ月草のはなだのおびの中はたゆとも

(長慶天皇千首・一三九)

寄帯恋

㉙ とけそめし花だの帯の色になど思ひかへせどかへらざるらん

(師兼千首・七八七)

月前草花

☆秋草の袂にかかるあさがほの花田の帯ぞ月にとけ行く

(草根集・四二六八)

擣衣

③石川や花田の帯のながき夜にたが中たえて衣うつらん

(同・四三三七)

長河似帯

☆月草の花だの帯か末かけて空色うつす山川の水(同・九一七〇)

寄夜恋

③独のみなめあかせば月草のはなだの帯の短夜もなし

(拾塵集・六二九)

悔恋

③しらざりき花だの帯の末つひにからき思ひにうつる心は

(柏玉集・二二八九)

催馬楽「石川」の詞章は、

石川の 高麗人^{こまうと}に 帯を取られて からき悔^くするいかなる いかなる帯ぞ 縹^{はなだ}の帯の 中はたいれなるか

かやるか あやるか 中はたいれたるか

というもので、「高麗人に帯を取られた」と恋の失敗を嘆く人物に
対して、「取られたという帯はどんな帯だい、縹色の(普段遣い)
の中が擦り切れているようないたしたことのない帯だろう」と周囲
がからかっているものと考えられる。この「縹の帯」を引いた和
歌のうち、☆印をつけた五首以外はすべて恋の歌、または恋の気分
を揺曳している歌であるが、特に注意されるのは以降、中世に入っ
てから、月草がともに詠み込まれる例が見えるようになり、縹の帯

が絶えやすいだけでなく、色までもがあせやすい、という捉え方が
出てくることである。つまり、「縹の帯」で表現される恋のはかな
さの程度がより強くなっていき、そうした傾向の中で、『閑吟集』
小歌「薄の契りや 縹の帯の ただ片結び」のようなものが生まれ
てくるものと考えられるのである。催馬楽の軽妙でやや滑稽な趣の
ある恋の世界は、和歌においては哀感に満ちたはかない恋の世界へ
とずらされていく。和歌の美意識に沿って、歌謡の世界が形を変え
ていくさまが見てとれよう。

三 季節の限定されない催馬楽から四季の和歌へ

第一節の「東屋」でもふれたように、催馬楽には季節の限定され
ない曲が多いが、以下、和歌の中では季節が設定されていく様子を
見ていきたい。(1)〜(4)の冒頭に催馬楽の詞章をあげ、次にその催馬
楽を引いたとおぼしい和歌の用例を掲げた。

(1)「沢田川」

沢田川 袖つくばかりや 浅けれど はれ

浅けれど 恭仁^くの宮人や 高橋わたす

あはれ そこよしや 高橋わたす

俊忠卿家歌合に五月雨をよめる

藤原顕仲朝臣

①さみだれにみづまさるらしさはだ川まきのつきはしうきぬばか

(金葉集一度本・夏・一三八)

五月雨

②五月雨の日をふるままにさはだがははそのたかはしはなのみなり

(師光集・二四)

夏十五首

③さはだがはまきのつぎはしうきぬれば人もわたらず五月雨のころ
(拾玉集・三二七)

夏七首

静空

④五月雨に水こえにけりさはだ河くに宮人のわたす高はし

(御室五十首・六六)

三百九十九番

夏二 左

小侍従

⑤さみだれに水やこゆらむさはだ河袖つくばかりあさかりしかど

(千五百番歌合・七九六)

夏十首

⑥さはだ川ひとつたなはし水こえてわたる人なき五月雨の頃

(寂身法師集・四八四)

嘉元百首歌たてまつりけるに、橋

津守国冬

※あさき瀬はたでも行くべきさはだ河まきのつぎ橋何渡すら
ん
(新後拾遺集・雜上・一二九〇)

「沢田川」は、恋の和歌に詠まれることもあり、冬や春の和歌の例も皆無ではないが、『金葉集』の歌の影響か、夏の歌として五月雨とともに詠まれることが多い。催馬楽「沢田川」の表面上の意味をとるのはさほど難しくないが、一体何を歌っているのかについては、橋守部『催馬楽入文』に「浅き小流れに国々へ課銭を出さしめて、さてさて高き高はしかなといふ下心」「民の心に恨む所ありて、こは人のわたる高橋にはあらで、値の高き高橋也といふ意を諷諫してちまたにてうたひし也」という説があり、臼田甚五郎は「元来は万葉風の新京賛歌であつたらう」とする。催馬楽に込められた真意を汲み取るのは困難だが、和歌においては、催馬楽で歌われた橋のなかった浅い沢田川は前提としてあって、その浅いはずの沢田川が

雨で増水していることに焦点を当てるものが多い。管見では、一首だけ、催馬楽と同様に、川が浅いことに注意を向け、浅い川にどうして橋を渡すのだろうかという疑問を含む和歌(※)が見いだされた。やや脇道にそれたが、沢田川が和歌の中で夏の季節感を与えられていくことが確認できよう。

(2)「席田」

むしろだ 席田の 伊津貫川にや 住む鶴の

住む鶴の 住む鶴の 千歳をかねてぞ 遊びあへる 千歳をか

ねてぞ 遊びあへる

題不知

藤原道経

①きみがよはいくよろづよかかさぬべきいつぬきがはのつるのけ
ごろも
(金葉集二度本・賀・三三三)

月三十五首

☆②月夜にはいつぬき河も氷してすむつるをさへ霜かとぞみる

(田多民治集・二〇五)

氷上雪

為業

☆③つららゐるいつぬきがはにふるゆきをわがけごろもとたつやみ
るらん
(為忠家後度百首・五四七)

廿七番 月 右

沙弥見仏

★④むしろ田に夜はの水をしきそへいつぬき川にすめる月影

(石清水若宮歌合 正治二年・一八六)

鳥

良経

⑤むしろ田のいつぬき川のしきなみにむれゐる鶴のよろづ代の声

(正治初度百首・四九八)

祝言

後鳥羽院

⑥むしろ田やかねてちとせのしるきかないいつぬき川に鶴あそぶな

り

(正治後度百首・一〇〇)

雪

★⑦さえさえて雪ふりしけばむしろだのいつぬきがほぞまづ氷りける
 (拾玉集・三六)

祝のころを

⑧むしろだにちとせをかねてすむ鶴も君がよはひにしかじとぞおもふ
 (師光集・一一六)

氷

★⑨おしなべて氷ぞしける筵田のいつぬき川の冬のあけぼの
 (寂身法師集・一八八)

催馬楽「席田」は、鶴を歌い込んだ祝言の歌謡であるが、これを引きいたと思われる和歌の例を、早いところから、鎌倉期まで拾った。催馬楽には鶴が歌い込まれているので、季節感を持たせるとすれば、冬になるのは当然であるが、和歌においては、雪や氷、霜など冬の景物とともに詠まれることが多い。用例の上に印がないものは鶴は詠まれていてもその他には特に冬を表す景物は含まれないもの、☆をつけたのは、鶴と冬の景物が共に詠み込まれているものである。そして★をつけたような、鶴の語の含まれない、冬の詠歌も登場してくる。すなわち、無印↓☆↓★の順にだんだんと祝言の色合いが薄くなってゆき、季節の歌として展開していくことが確認できよう。

(3)「真金吹」

真金吹く 吉備の中山 帯にせる なよや らいしなや さい

しなや 帯にせる 帯にせる はれ

帯にせる 細谷川の 音のさやけさや らいしなや さいしな

や 音のさや 音のさやけさや

長承三年六月常磐五百番歌合 螢照廻流 源仲正

①夏むしのはそ谷河をてらすよはたまのおびするきびの中山

同

為忠朝臣

②まがねふくきびの中山夏くればすだくほたるのかげぞひまなき

同

藤原忠隆

③おびにするほそ谷河に見ゆる火ははたるもまがねふくにやあるらん
 (夫木和歌抄・三三五―三三五)

夏十首

親隆

④しばしまてまがねふくてふ音はやめきびの中山ほととぎすなく

ただのりのいへのうたあはせに、さみだれを

(久安百首・六二四)

⑤たにがはのおびのひろさやまさるらんさみだれしげきびのなかやま
 (有房集・八九)

かはのうへのこほり

⑥冬くればほそたにがはにこほりしてたまのおびするきびのなか山
 (実家集・二〇六)

山

冬七首

隆房

⑦谷川の水は氷にむすばれてとけぬおびするきびの中山
 (御室五十首・一三七)

春

(御室五十首・一三七)

⑧春くれば麓めぐりの霞こそおびとは見ゆれきびの中山
 小侍徒

春

(正治初度百首・二〇〇八)

春

信広

⑨ひきつらねたかねのこしに帰る雁これやおびするきびの中山
 (正治初度百首・二二二九)

霞を

(正治初度百首・二二二九)

⑩あさまだきたなびきわたるかすみをもおびにはしけりきびの中

山

冬

⑪ まがねふくきびの中山うづもれてほそたに川も雪のした水

(光経集・五〇二)

冬川

⑫ つららゐるほそ谷川のほどたえてみゆきふるらしきびの中山

(法印珍誉集・一六)

河霞

⑬ つららゐるしほそ谷川はうづもれて霞おびたるきびのなかやま

(隣女集・一七二四)

溪五月雨

⑭ 五月雨にほそたに川もなかりけりたきつせひろききびのなか山

(雅有集・六六一)

九月十三夜、九条大納言家会 河上霧

⑮ あけゆけどほそ谷河はみえわかで霧をおびたるきびの中山

(為理集・五二三)

「真金吹」は仁明天皇の時の大嘗会和歌として「まがねふくきびの中山おびにせるほそたに河のおとのさやけさ」の形で『古今集』に載っており、厳密に言えば、催馬楽のみの享受とは言えないが、季節感が与えられていく例としていくつかの和歌をあげた。①③は夏の歌で蛩がともに詠み込まれ、蛩の光に照らされた川を光る帯と捉える幻想的な情景も歌われている。④も夏の歌でほととぎすが詠み込まれる。また⑤は五月雨によって川幅が広がり、帯の幅も広がっていると見立てるもので、⑭も「帯」にはふれないが、ほぼ同じ発想である。⑥⑦は冬の歌であり、いずれも氷が帯と見立てられている。⑧⑨は春の歌でそれぞれ霞、雁を帯と見る。⑧と同じ発

想は⑩⑬にも見える。また⑮は霧がかかった山の様子を詠み、⑬と近い詠みぶりである。⑪⑫は冬の歌、⑮は秋の歌で、「真金吹」の場合は色々な季節が設定される。この後の用例もあわせてみると、秋は少ないが、あとの三つの季節には際立った差はない。

(4)「美作」

美作や 久米の 久米の佐良山 さらさらに なや さらさらに なや

さらさらに 我が名 我が名は立てじ 万代までにや 万代までにや

① みまさかやくめのさらやまさらさらにむかしのいまもこひしきやなぞ
(伊勢集・三九八〔古歌集成部分〕)

あひての恋

② わりなきをしなむふしなむ美作やくめのさら山いまさらに君

(海人手古良集・五四)

月三十五首

③ 万代もくめのさら山さらさらに今夜にたる月はあらじな

(田多民治集・二一九)

冬

④ おとに聞くくめのさら山さらさらにおのが名たててふるあられかな
(後鳥羽院御集・五六四)

美作にある人のもとへ

⑤ 思ひやるくめのさら山さらさらと霞ふるよの竹の下庵

(挙白集・一二三三)

冬別恋

⑥ 玉さかにくめのさら山更に又うきにかへらんあられふる夜を

(逍遊集・二二一四)

「美作」も「真金吹」と同様、清和天皇の時の大嘗会和歌として「美作やくめのさら山さらさらにわがなはたてじよろづよまでに」の形で『古今集』に載っている。この「美作」は「わが名は立てじ」というような表現を含んだ恋の歌であるが、「万代」の語を持っためか、賀の歌とされたらしい。「久米の佐良山」の語を用いた和歌の例を一部あげた。①②のように恋歌になっていることも多いが、④の後鳥羽院が霰とともに冬歌として詠み、それが⑤⑥のように江戸期まで継承されていた。「美作」を引いた和歌の場合は、季節を設定していないものも相当数見られるが、季節の歌としては冬の歌が多くなっている。

四 縁語による展開

縁語による展開として、ここでは、「青柳」の例を見ておきたい。「青柳」の詞章は次の通り。

青柳を 片糸に縫^{かいと}りて や おけや 鶯の おけや
鶯の 縫ふといふ笠は おけや 梅の花笠や

「青柳」は『古今集』に「返し物の歌」としてとられているので、催馬楽として歌われていたものを『古今集』が記したことになる。⁽⁸⁾この「青柳」に含まれる「梅の花笠」は和歌の中に多くの例を見いだすことができる。

さて、催馬楽「青柳」は鶯が青柳の糸で梅の花笠を縫うというところしか歌っていないのに対して、和歌に詠み込まれた「梅の花笠」は、「笠」と縁のある、「雨」や「雪」とともに詠まれることが非常に多い。次に一例をあげる。

題しらず

①春雨のふらばの山にまじりなん梅の花がさありといふなり

(後撰集・春上・三三)

うだの院にて、むめのはなをよみはべりける

②ちるまではきつつだにみむはるさめに我をぬらすなむめのはながさ

(頼基集・九)

やなぎにみのむしのつきたるをみて

③雨ふらば梅の花がさ有るものを柳につけるみのむしのなぞ

(和泉式部集・五一四)

庭のむめをもてあそぶ

④をる袖ぞ雪げのつゆにぬれにける梅の花がさかひなかりけり

(能因法師集・一八三)

雪朝聞鶯といへることを

⑤雪をおもみ鶯いたく鳴くなるははらひやあへぬ梅の花がさ

(林葉和歌集・六三)

みのむしのむめのはなのさきたる枝にあるを見て

律師慶暹

⑥むめのはながさきたるみのむし

まへなるわらはのつけける

あめよりはかせふくなどやおもふらん

(金葉集二度本・雑下・六六二)

卯月郭公

※五月雨もちかづきぬとや時鳥卯花がさをかきねにはぬふ

(挙白集・五三二)

なお、③の和泉式部詠から、「梅の花笠」と「糞虫」がともに詠

まれることも散見し、⑥はその例になる。近世に至ると※をつけてあげたように、鶯が梅の花笠を縫うという催馬楽に対し、時鳥が卯の花笠を縫うという発想のものが見出された。催馬楽のパロディーとして注意されよう。

以上、催馬楽のことはを用いながら、そのもとの催馬楽が歌う世界とは異なる方向へ和歌の世界が広がっていくことを見てきた。当然予想されることではあるが、和歌の中には季節感が導入されることが多く、また、同じ恋の歌でもよりはかなさを強調していくようになったり、縁語によって、もとの催馬楽にはなかった要素を入れ、むしろそれが中心になっていくような場合を確認した。催馬楽を享受した和歌は、もともとなった歌謡の描く状況から展開・変容を経て、新たな世界を獲得していくのである。

注

- 1 田中初恵「催馬楽と和歌——定家に至るまでの様相——」『古典論叢』第二十号 一九八八年九月、小野恭靖「催馬楽出自の歌ことば——歌枕・地名を中心として——」（小町谷照彦・三角洋一編『歌ことばの歴史』笠間書院 一九九八年）、同「和歌と催馬楽——顕昭の催馬楽関連記事を起点と

して——」『学大国文』第四十二号 一九九九年二月、植木朝子「催馬楽と和歌」『古代中世文学論考』第十二集 新典社 二〇〇四年五月）など。

2 『新編国歌大観』による。和歌の引用は、以下、同書による。

3 新編日本古典文学全集『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』（小学館 二〇〇〇年）による。催馬楽の引用は、以下、同

書による。

4 植木朝子「中世小歌 愛の諸相——『宗安小歌集』を読む——」（森話社 二〇〇四年）第I部第12章。

5 注4に同じ。

6 『新訂増補橘守部全集』第七卷（東京美術 一九六七年）による。

7 注3書による。

8 片桐洋一「古今集卷二十「かへしものの歌」考」（樋口芳麻呂編『王朝和歌と史的展開』笠間書院 一九九七年）。

* A Study of the Relationship between Saibara and Waka
 ** Tomoko Ueki (Japanese Language and Literature)
 キーワード 催馬楽 和歌